2Jp-9　　女子学生とその母親の食生活に関する実態調査（第１報）

秋草学園高　　細川博子
秋草短大・幼教　出沢美和　高橋美保

《目的》社会状況の変化に伴い家庭に様々な影響が現れ、現在我々の食生活は多様化している。情報文化の発達により食事のグルメ化やファッション化が進み、日本人の食パターンが崩壊したため若者の嗜好は画一化され単純化している。また、流通の拡大により世界中から食品が入りこみ、いつでもどこででも食することができる状況にある。この飽食の時代に育った若者達とその母親について食生活に関する意識調査を行い、比較検討を試み若干の知見を得たので報告する。

《方法》対象は、本学学生97名、本学生徒79名とその母親131名である。調査は1994年12月から1月の時期に、質問紙による自己記入法によって行った。回収率は学生・生徒100.0%、母親77.2%である。調査内容は、食ライフスタイル・健康関心度・嗜好の３項目について相違点を探るべく調査を行った。

《結果》学生・生徒群は食に対する関心度が薄く、食事をする相手を選び、楽しく食事をする食ファッション化傾向が強い。健康に対しては、食無感心型が多く「食事にお金をかけるより他のことに使いたい」と答えた者は59.4%で母親群の３倍であった。母親群では健康に気を使いながら食事をとる食健康派が91.4%と多く、特に塩分、食物繊維、カルシウムの摂取に留意している傾向がみられた。さらに、家族とのコミュニケーションを大切に考え、食生活の向上を意識している食健全派も多かったが、実際には家族そろって食事をする頻度は「ほとんど毎日」が40.7%であった。嗜好について好きなものは、学生・生徒群ではスパゲティー、ハンバーグ、果物、カレーライスの順で欧米画一型志向がみられ、母親群は煮物、果物、寿司の順で和風素材型志向であった。